

共通テスト試行調査として出てきた問題は、似ても似つかぬ単純な設問となっていて、マークシートでもできるような問題にすり替わっていました。

センター試験で測定できない思考力を真剣に追究するのであれば、本来、「思考力とは何か」という大議論を経なければ、改革には踏み出せないはずですが、ところが、そうした議論があったという話は全く耳にしたことではなく、肝いりで始まった記述式問題の導入も最終的に撤回されてしまったわけです。これは一体どういうことなのかという疑問が残ります。

——問題の検証も全くされていないか？

倉元 実はこの時期、私たちの研究グループは文科省の委託を受けて検証をしています。「国語」の個別学力検査で思考力を測る新たな問題の開発がテーマだったのですが、比較のために「数学」の問題も用意してモニター調査を実施しました。新旧の問題を混ぜ合わせて、受験を目指す高校生に解いてもらうと

ともに、「何を測っていると思うか」というアンケートをつけました。その結果、イメージ例の問題は「新奇性」に富み、「情報処理能力」を測る問題だと認知されました。これは一連の研究の最初の調査でしたが、この時点で結論は出ていたのです。実は、最初から、存在していたのはスローガンだけだったのではないかと疑っています。

気になるのは、高校の先生方などが「共通テストのような思考力を測る問題」といった表現を気軽にお使いになることです。共通テストが本当に思考力を測る問題といえるのかどうか、立ち止まって考えてみる必要があると思います。

**入試研究者の人材不足  
学会を供給母体に**

——共通テスト以外の入試の現状はどの様にお考えですか？

倉元 キーワードは多様化です。多様化が進んできたことに関して、マスコミではあたかも良いことのように取り上げられていますが、現場的に見るとすごく



疑問に思います。

例えば、中国の入試は極めて画一的なので、中国ではそれを問題視して多様化政策が行われています。この方向性はよくわかります。かつて日本の入試も画一的と見られていた時代があり、多様化しなければいけないという問題意識があったことは事実です。しかし、今の状況を考えたときに、さらにバラバラにしていった大丈夫か、大いに懸念しています。この問題は大学入試学会第1回大会の公開シンポジウムのテーマとして取り上げる予定です。

——具体的にどのような問題がありますか？

倉元 一度政策が動き出すと、最適な状態で止まらなくなるように感じます。どこかでブレーキをかける議論をしないと、行政自らが行き過ぎを止めるのは難しいのではないのでしょうか。

もう1つは、先ほどの共通テストのイメージ例でお話ししたように、具体的に細かい議論が大事だと思うのです。例えば、今の入試問題では思考力を測定できない、との意見が出てきたときに、完成された問題だけでなく、その問題がどのように作られて、どのように実施され、分析されて、教育に使われている

# 視点

## 「大学入試学」の成立と「入試研究者」の養成

●インタビュー  
**倉元直樹** 大学入試学会 理事長

くらもとなおき●東北大学高度教養教育・学生支援機構 高等教育開発部門 入試開発室 教授。東京大学教育学部卒業、同大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程単位取得満期退学。博士(教育学)。大学入試センター研究開発部助手、東北大学アドミッションセンター助教授などを経て現職。大学入試学会 理事長。



2023年12月、大学入試学会が設立された。「大学入試学」という学問分野の確立を目指す、初の学会組織である。

——同学会はどうのような役割を担っていくのか？ 初代理事長であり東北大学教授の倉元直樹氏に伺った。

### 失敗が約束されていた 高大接続改革

——大学入試学会はどのような経緯で設立されたのですか？

倉元 私が「大学入試学」という分野の必要性を提唱し始めたのは、17、18年ほど前になると思います。学問の分野というのは学会ができて初めて成立するものですので、そのためにも学会が必要だと考えました。

人が集まらない心配もあったので躊躇していたのですが、設立準備委員会を作って動いてみたら、様々な方に協力していただけて、昨年12月に発起人会を開くことができました。そこで初代理事長に選任され、学会の設立に至りました。

——設立の背景には、大学入試改

革が期待外れに終わったことがあるのでしょうか？

倉元 正直に言いますと、それは大きいと思います。学問は知見の蓄積というところがありませんが、過去の事例に全く学んでいなかった印象が強いのです。このままでは同じことを繰り返すし、輪廻のようなループからいつまでも抜け出せないのではないのでしょうか。さらに、あまり認識されていないかもしれませんが、基盤となる日本社会が徐々に弱っていく状況のなかで、日本の教育のナショナル・スタンダードを位置づけるアンカーとなる仕組みがどんどん壊れていきます。これはまずいのではないかと考えた次第です。

高大接続改革は、最初から失敗が約束されていると見ていましたが、実際には想像以上のことが起こりました。私自身は、1度導入されてから減茶苦茶なことが起こるのではないかと予測していたのですが、その前で止まりましたよね。けれども結局、方向転換とはならず、そのまま今に至っている状況です。

このプロセス全体を俯瞰的な目で見て問い直すことが必要だと、というのが正直なところだと思います。

——大学入試学会では、そこを問い直していくのでしょうか？

倉元 第1回大会で企画しているテーマの1つは、「『大学入試 共通テスト』の研究」です。成り立ちの検証のほか、今、実際に使われている共通テストの問題がセンター試験よりも受験生が学ぶ教材としてふさわしいのか、あるいは選抜の指標として本当にふさわしいのかという点とに關して、データを交えて議論したいと思っています。

——大学共通テストについて、先生ご自身のお考えは？

倉元 個人的には一刻も早くセンター試験に戻してもらいたいと思っています。何か少しでも良くなったところがあるのだからかという疑問はありますね。

共通テストは「思考力」を評価するという点で始まったのですが、最初にイメージ例(たまたき台)として提示された問題、特に数学の問題などは本格的な記述式問題でした。ところが、



るか、丁寧に追いつながら、ここを改善したらもっと思考力を測れるのではないか、といった議論をするべきです。「神は細部に宿る」のです。

そのような意味では、学会は行政ができないこと、やりたくてもやれない役割を担う機能もあると思います。ニュートラルな立場で、しかも我々の分野は実証科学が関わってくるので、エビデンスに基づいた議論ができるものと期待しています。

——多様化の1つとして、総合型選抜があります。難関大学が総合型選抜を導入するのは、一般選抜では意図する学生が取りづらくなってきたからでしょうか？

倉元 他大学のことはわかりませんが、過去のことでは、東北大学の場合はあまり関係ないと思います。第1志望の受験生の受験機会を増やすことを目的としてAO入試を位置づけてきたので、学生の質はどの入試でも根本的に変わりません。対照的なのはAO入試を最初に導入した慶應SFCモデルです。慶應SFCは学力を犠牲にして選

抜方法で多様化を体現したのですが、我々は、学力は多様化の目標には含めませんでした。

ですから「学力重視のAO入試」という看板を掲げてずっとやってきています。受験生の視点では一般と準備が重なることが大事です。「一般選抜をターゲット」とし、ステップとしてAO入試を受けてきて下さい」という呼びかけをしてきました。その結果、東北地方を中心とした高校ではそのコンセプトが浸透しています。東北大のAO入試を織り込んでスケジュールを組む学校も多いと思います。

——大学入試学会では、文科省への提言も行おうのでしょうか？

倉元 学会という意味では、それはかなり先の話になります。まずは、人材育成です。せっかく国立大学を中心にアドミッシヨンセンターのようなポジションができて、自分の大学の入試を研究する立場の人たちが増えてきているのに、そこへ人材を送り出す供給母体がありません。学会を育成の場に行いたいと考えています。アドミッシヨン

校は分断されています。それを繋ぐ役目を果たしたいのです。

そこで工夫をしたことの1つが、「大学等協議会」と「高等学校等協議会」という2つの団体会員の仕組みです。団体会員となり、その団体に所属している人が誰でもイベントに参加できるようにしたこと、組織としての利便性を図っています。そこでは会員限定の事業を行い、本音の議論ができる場を作ります。さらなる重要ポイントは、両協議会の共催イベントです。そこから、多様化の問題を適正に整理していくアイデアなどが生まれてくることも期待しています。

——高校の先生方は入試に疑問を持ちながらも、提言する場所がありません。学会がそのような場所になりますか？

倉元 小中高の先生方は目の前の子どものために全力を注ぐことがミッションです。日本の学校にはそのような文化があり、それは大切なことだと思います。多様化した入試を俯瞰的に見て、対峙して、提言までするのは一



の職に就いたときに、今は入試研究でキャリアを積む場がないので、掲載論文が研究成果としてカウントしてもらえないような学会誌を作りたいのです。これからの人たちのためには、そこはすごく大きいですね。

また、日本の大学入試を考えると、やはり大事なのが高大接続です。高校で教育されて大学に入る人が圧倒的多数という現状において、大学入試は高校教育のスタンダードや中身を決める機能があります。今の多様化の問題にしても、日本では大学に入学者の決定権があるので選抜方法を自由に設定できるわ

教員の手には余ります。

現場の先生方が地上で自分たちの見える視野のなかで戦っているとする、研究者はもう少し周囲が見渡せる視点で物事を考えることが可能はずです。それができる立場だからこそ、問題を整理して、お伝えするという大事な役割があります。

今、その機能を担っているのは民間の教育産業です。以前は政策に口を出すことはありませんでしたが、一部がそのような動きをして、結果的に高大接続改革の痛い経験に結びつきました。一部企業の私的利益誘導に引きずられた結果です。本来は民間とは切り離して、大学側がきちんと見るべきです。

ただ、学者というのは天に昇るのが好きで、千メートル、1万メートルまで昇ってしまいがちです。そうすると地上で起きている出来事は見えません。そういう姿勢で何かを言ったところで、本当に現場に役立つのか疑問です。

私自身はプロペラ機ぐらいの感覚で見たいのです。そ

けですが、本当に送り出す側の高校現場の実情に合っているのか検証すべきです。これも今度の公開シンポジウムで取り上げるテーマになります。

——現在、アドミッシヨンセンターには研究者はあまりいないのでしょうか？

倉元 国立大学アドミッシヨンセンター連絡会議という組織があります。私は先日まで事務局長を務めていたのですが、一昨年、全国の国立大学を対象に調査をしました。その時にわかったのは、アドミッシヨンセンターという組織は実に多様で、専任教員を置いているところもあ

ことから何が見えるのか、高校の先生方にお伝えして、現場感覚と照らし合わせながら考えていただくのがいいと思います。

学会に「高等学校等協議会」を作ったもう1つの理由は、個々の先生が自分の立場で何とかしようと思っても難しい状況下で、多様な現場の実情を集めて集約し、今起きていることを幅広く理解できるような場を作りたいと考えたからです。

——最後に、高校の先生方へのメッセージをお願いします。

倉元 大学入試学会は始まったばかりです。関心を持たれた先生方には、積極的に会員として加わっていただきたいと思えます。正会員の他、会費の安い準会員という制度があります。

高等学校等協議会には、現時点で10を超える学校や団体に加盟いただいています。簡単ではないと思いますが、高校や複数の高校で作る組織、有志の先生方でグループを作るなどして、積極的に参加していただけるとありがたいです。

(取材・構成／沢辺有司)

### 【大学入試学会】

<https://www.jaruas.jp>

### ○大学入試学会第1回大会

【日程】

2024年9月27日(金)~9月29日(日)

【場所】

東北大学青葉山新キャンパス

### 団体会員として 高校単位で参加可能

——大学入試学会には高校の先生も多数参加されていますね？

倉元 今、実態として大学と高校は分断されています。それを繋ぐ役目を果たしたいのです。そこで工夫をしたことの1つが、「大学等協議会」と「高等学校等協議会」という2つの団体会員の仕組みです。団体会員となり、その団体に所属している人が誰でもイベントに参加できるようにしたこと、組織としての利便性を図っています。そこでは会員限定の事業を行い、本音の議論ができる場を作ります。さらなる重要ポイントは、両協議会の共催イベントです。そこから、多様化の問題を適正に整理していくアイデアなどが生まれてくることも期待しています。

——高校の先生方は入試に疑問を持ちながらも、提言する場所がありません。学会がそのような場所になりますか？

倉元 小中高の先生方は目の前の子どものために全力を注ぐことがミッションです。日本の学校にはそのような文化があり、それは大切なことだと思います。多様化した入試を俯瞰的に見て、対峙して、提言までするのは一